

「古事記と日本書紀」
— 倭建命の話をやむ —

群馬県立女子大学 北川 和秀

【古事記】

【日本書紀】

【一、誕生】
大帯日子淤斯呂和氣天皇、纏向の日代宮に坐しまして、天の下を治めき。

此の天皇、吉備臣等が祖、若建吉備津日子の女、名は針間の伊那毗能大郎女を娶りて、生みし御子は、櫛角別王。次に大碓命。次に小碓命、亦の名は倭男具那命。次に倭根子命。次に、神櫛王。……（以下略・他の妃と皇子の記述あり）……

【一、誕生】
播磨稲日大郎姫 一に云はく、稲日稚郎姫といふ。を立てて皇后とす。后、二の男を生れます。第一をば大碓皇子と曰す。第二をば小碓尊と曰す。一書に云はく、皇后、三の男を生れます。其の第一、三を稚倭根子皇子と曰すといふ。其の大碓皇子・小碓尊は、一日に同じ胞にして双に生まれませり。天皇異びたまひて、則ち碓に誥びたまひき。故因りて、其の二の王を号けて、大碓・小碓と曰ふ。是の小碓尊は、亦の名は日本童男。亦是日本武尊と曰す。幼くして雄略しき氣有します。壮に及びて容貌魁偉し。身長一丈、力能く鼎を扛げたまふ。（景行二・三・三）

【二、兄を殺害】

天皇、小碓命に詔はく、「何とかも汝が兄の、朝夕の大御食に参る出で来ぬ。専ら汝、ねぎし教へ覺せ」と、如此詔ひてより以後、五日に至るまで、猶参る出でず。尔くして、天皇、小碓命を問ひ賜はく、「何とかも汝が兄の久しく参る出でぬ。若し未だ誨へず有りや」ととひたまふに、答へて白ししく、「既にねぎ為つ」とまをしき。又、詔はく、「如何にかねぎしつる」とのりたまふに、答へて白ししく、「朝署に廁に入りし時に、待ち捕へ、搦り批きて、其の枝を引き闕きて、薦に裏みて投げ棄てつ」とまをしき。

【三、熊曾征伐】

是に天皇、其の御子の建く荒き情を惶りて詔はく、「西の方に熊曾建二人有り。是、伏はず礼無き人等ぞ。故、其の人等を取れ」とのりたまひて、遣しき。此の時に当りて、其の御髪を額に結びき。尔くして、小碓命、其の姨倭比売命の御衣・御裳を給はりて、剣を御懐に納れて幸行しき。

【三、熊曾征伐】

日本武尊を遣して、熊襲を撃たしむ。時に年十 六。……（景行二七・一〇・一三）

（熊襲の首領の名は、取石鹿文、別名川上梟帥。以下、古事記とほぼ同様。）

故、熊曾建が家に到りて見れば、其の家の辺にして軍三重に囲み、室を作りて居りき。是に、「御室の樂を為む」と言ひ動みて、食物を設け備へき。故、其の傍を遊び行きて、其の樂の日を待ちき。尔くして、其の樂の日に臨みて、童女の髪之如く、其の結へる御髪を梳り垂れ、其の姨の御衣・御裳を服て、既に童女の姿と成り、女人の中に交り立ちて、其の室の内に入り坐しき。尔くして、熊曾建の兄弟二人、其の嬖子を見成て、己が中に坐せて盛りに樂びき。故、其の酣なる時に臨みて、懐より剣を出し、熊曾が衣 衿を取りて、剣を其の胸より刺し通しし時に、其の弟建、見畏みて逃げ出でき。乃ち、其の室の椅の本に追ひ至り、其の背の皮を取りて、剣を尻より刺し通しき。

尔くして、其の熊曾建が白して言ひしく、「其の刀を動すこと莫れ。僕、白す言有り」といひき。尔くして、暫らく許して押し伏せき。是に、白して言ひしく、「汝が命は、誰ぞ」といひき。尔くして、詔ひしく、「吾は、纏向の日代宮に坐して大八島国を知らず、大帯日子淤斯呂和氣天皇の御子、名は、倭男具那王ぞ。おれ熊曾建二人、伏はず礼無しと聞き看して、おれを取り殺せと詔ひて、遣せり」とのりたまひき。尔くして、其の熊曾建が白ししく、「信に然あらむ。西の方に、吾二人を除きて、建く強き人無し。然れども、大倭国に、吾二人に益して、建き男は坐しけり。是を以て、吾、御名を献らむ。今より以後は、倭建御子と称ふべし」とまをしき。是の事を白し訖るに、即ち熟瓜の如く振り析きて、殺しき。故、其の時より御名を称へて、倭建命と謂ふ。然くして、還り上る時に、山の神・河の神と穴戸神とを皆言向け和して参る上りき。

「今より以後、皇子を号けたてまつりて日本武尊皇子と稱すべし」とまうす。言訖りて乃ち胸を通して殺したまひつ。故、今に至るまでに、日本武尊と称め曰す、是其の縁なり。……（景行二七・一二）
（日本武尊は、熊曾を平定したことを天皇に復命する。）
天皇、是に、日本武の功を美めたまひて異に愛みたまふ。……（景行二八・二・一）

【四、出雲征伐】

即ち、出雲国に入り坐しき。其の出雲建を殺さむと欲ひて、到りて即ち友を結びき。故、窃かに赤禱以て詐りの刀を作り、御佩と為て、共に肥河に沐みき。尔くして、倭建命、河より先づ上り、出雲建が解き置ける横刀を取り佩きて、詔ひしく、「刀を易へむと為ふ」とのりたまひき。故、後に出雲建、河より上りて、倭建命の詐りの刀を佩きき。是に、倭建、誂へて云ひしく、「いざ刀を合せむ」といひき。尔くして、各其の刀を抜かむとせし時に、出雲建、詐りの刀を抜くこと得ず。即ち、倭建命、其の刀を抜きて、出雲建を打ち殺しき。尔くして、御歌に曰はく、

23 やつめさす 出雲建が 佩ける大刀 黒葛多纏き さ身無しにあはれ 故、如此撥ひ治めて、参り上りて、覆 奏しき。

【五、東征の下命】

尔くして、天皇、亦、頻りに倭建命に詔はく、「東の方の十二道の荒ぶる神とまつろはぬ人等を言向け和し平げよ」とのりたまひて、吉備臣等が祖、名は御鉏友耳建日子を副へて遣しし時に、ひひら木の八尋矛を給ひき。故、命を受けて罷り行きし時に、伊勢大御神の宮に参り入りて、神の朝廷を拜みて、即ち其の姨倭比売命に白さく、「天皇の既に吾を死ねと思ふ所以や、何、西の方の悪しき人等を撃ちに遣して、返り参る上り来し間に、未だ幾ばくの時を経ぬに、軍衆を賜はずして、今更に東の方十二道の悪しき人等を平げに遣しつ。此に因りて思惟ふに、猶吾を既に死ねと思ほし看すぞ」と、患へ泣きて罷りし時に、倭比売命、草那藝剣を賜ひ、亦、御囊を賜ひて、詔ひしく、「若し急かなる事有らば、茲の囊の口を解け」とのりたまひき。

(参考)

【四、出雲征伐】

(出雲国造家の出雲振根と飯入根の兄弟の間には、出雲の神宝の献上を巡つて確執があつた。)是を以て、既に年月を経れども、猶根 忿を懷きて、弟を殺さむといふ志有り。仍りて弟を欺きて曰はく、「頃者、止屋の淵に多に妻生ひたり。願はくは共に行きて見欲し」といふ。則ち兄に随ひて往く。是より先に、兄窃に木刀を作れり。形真刀に似る。当時自ら佩けり。弟真刀を佩けり。共に淵の頭に到りて、兄の、弟に謂りて曰はく、「淵の水清冷し。願はくは共に游泳みせむと欲ふ」といふ。弟、兄の言に従ひて、各佩かせる刀を解きて、淵の辺に置いて、水中に沐む。乃ち兄先に陸に上りて、弟の真刀を取りて自ら佩く。後に弟驚きて兄の木刀を取る。共に相撃つ。弟、木刀を抜くこと得ず。兄弟の飯入根を撃ちて殺しつ。故、時人、歌して曰はく、

20 や雲立つ 出雲梟帥が 佩ける太刀 黒葛多巻き さ身無しに あはれ (崇神六〇・七・一四)

【五、東征の下命】

(蝦夷が反乱を起こした。天皇は誰を遣わせばよいか、群臣に諮る。)日本武尊奏して言したまはく、「臣は先に西を征ちしに勞りき。是の役は必ず大碓皇子の事ならむ。」とまうしたまふ。時に大碓皇子、愕然ちて、草の中に逃隠れぬ。則ち使者を遣して召し来しむ。爰に天皇責めて曰はく、「汝が欲せざらむを、豈強に遣さむや。何ぞ未だ賊に対はずして、予に懼るること甚しき」とのたまふ。此に因りて、遂に美濃に封さす。仍りて封地に如る。是身毛津君・守君、凡て二の族の始祖なり。是に、日本武尊、雄誥して曰したまはく、「熊襲既に平ぎて、未だ幾の年も経ずして、今更東の夷叛けり。何の日にか大平ぐるに速らむ。臣、勞しと雖も、頓に其の乱を平けむ」とまうしたまふ。

(天皇は、斧・鉞を日本武尊に授けて、蝦夷の生熊等のことを詳細に伝える。そして、日本武尊にこう告げる。)今朕、汝を祭るに、為人、身体長く大にして、容姿端正し。力能く鼎を扛ぐ。猛きこと雷電の如し。向ふ所に前無く、攻むる所必ず勝つ。即ち知りぬ、形は我が子、実は神人にますことを。寔に是、天の、朕が不叡くして、且国の不平れたるを慰びたまひて、天、業を経綸へしめたまひ、宗廟を絶えずあらしめたまふか。亦是の天下は汝の天下なり。是の位は汝の位なり。願はくは深く謀り遠く慮りて、姦しきを探り変くを伺ひて、示すに威を以てし、懐くるに 徳 を以てして、兵甲を煩さずして自づからに臣隸はしめよ。即ち言を巧みて暴ぶる神を調へ、武を振ひて姦しき鬼を攘へ」とのたまふ。(景行四〇・七・一六)

(日本武尊は出発し、途中、道をそれて伊勢神宮に参る。)仍りて倭 姫命に 辞して曰はく、「今天皇が 命をうけたまははれ、東に征きて諸の叛く者どもを誅へむとす。被りて、東に征きて諸の叛く者どもを誅へむとす。故、辞す」とのたまふ。是に、倭姫命、草薙剣を取りて、日本武尊に授けて曰はく、「慎め。な怠りそ」とのたまふ。(景行四〇・一〇・七)

【六、焼津の火難】

故、尾張国に到りて、尾張国 造が祖、美夜受比売の家に入り坐しき。乃ち婚はむと思へども、亦、還り上らむ時に、婚はむと思ひて、期り定めて、東の国に幸して、悉く山河の荒ぶる神と伏はぬ人等とを言向け和し平げき。故尔くして、相武国に到りし時に、其の国造、詐りて白ししく、「此の野の中に大き沼有り。是の沼の中に住める神は、甚だ道速振る神ぞ」

日本武尊、初めて駿河に至る。其の処の賊、陽り従ひて、欺きて曰さく、「是の野に、麋鹿甚だ多し。気は朝霧の如く、足は茂林の如し。臨して狩りたまへ」とまうす。日本武尊、其の言を信けたまひて、野の中に入りて覓獸したまふ。賊、王を殺さむといふ情有りて、王とは、日本武尊を謂ふぞ。其の野に放火烧。王、欺かれぬと知しめして、

とまをしき。是に、其の神を看行さむとして、其の野に入り坐しき。尔くして、其の国造、火を其の野に著けき。故、欺かえぬと知りて、其の姨倭比売命の給ひし囊の口を解き開けて見れば、火打、其の裏に有り。是に、先づ其の御刀を以て草を刳り撥ひ、其の火打を以て火を打ち出して、向ひ火を著けて焼き退け、還り出でて、皆其の国造等を切り滅して、即ち火を著けて焼きき。故、今に焼遣と謂ふ。

【七、弟橘比売の入水】

其より入り幸して、走水海を渡りし時に、其の渡の神、浪を興し、船を廻せば、進み渡ること得ず。尔くして、其の后、名は弟橘比売命、白ししく、「妾、御子に易りて、海の中に入らむ。御子は、遣さえし政を遂げ、覆奏すべし」とまをしき。海に入らむとする時に、菅置八重・皮置八重・絶置八重を以て、波の上に敷きて、其の上を下り坐しき。是に、其の暴浪、自ら伏ぎて、御船を進むこと得たり。尔くして、其の後の歌ひて曰はく、

24 さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし 君はも

故、七日の後に、其の後の御櫛、海辺に依りき。乃ち其の櫛を取り、御陵を作りて、治め置きき。

其より入り幸し、悉く荒ぶる蝦夷等を言向け、亦、山河の荒ぶる神等を平け和して、還り上り幸しし時に、足柄の坂本に到りて、御粮を食む処に、其の坂の神、白き鹿と化りて来立ちき。尔くして、即ち其の咋ひ遣せる蒜の片端を以て、待ち打ちしかば、其の目の中て、乃ち打ち殺しき。故、其の坂に登り立ちて、三たび歎きて、詔ひて云ひしく、「あづまはや」といひき。故、其の国を号けて阿豆麻と謂ふ。

【八、酒折宮】

即ち、其の国より甲斐に越え出でて、酒折宮に坐しし時に、歌ひて曰はく、

25 新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる 尔くして、其の御火焼の老人、御歌に続き、歌ひて曰はく、

26 日々並べて 夜には九夜 日には十日を 是を以て、其の老人を誉めて、即ち東国造を給ひき。

【九、美夜受比売】

其の国より科野国に越えて、乃ち科野の坂の神を言向けて、尾張国に還り来て、先の日に期れる美夜受比売の許に入り坐しき。是に、大御酒盞を献りし時に、其の美夜受比売、大御酒盞を捧げて献りき。尔くして、美夜受比売、其の、おすひの欄に、月経著けたり。故、其の月経を見て、御歌に曰はく、

27 ひさかたの 天の香具山 鋭暗に さ渡る鵲 弱細 撓や腕を 枕かむとは 吾はすれど さ寝むとは 吾は思へど 汝が着せる 襲衣の欄に 月立ちにけり

尔くして、美夜受比売、御歌に答へて曰はく、

28 高光る 日の御子 やすみしし 我が大君 あらたまの 年が 来経れば あらたまの 月は来経行く うべな うべな うべな 君待ち難に 我が着せる 襲衣の欄に 月立たなむよ

故尔くして、御合して、其の御刀の草那藝剣を以て、其の美夜受比売の許に置きて、伊服岐能山の神を取りに幸行しき。

【一〇、伊吹山の神】

是に、詔はく、「茲の山の神は、徒手に直に取らむ」とのりたまひて、其の山に騰りし時に、白き猪、山の辺に逢ひき。其の大きき、牛の如し。尔くして、言挙為て詔はく、「是の白き猪と化れるは、其の神の使者ぞ。今殺さずとも、還らむ時に殺さむ」とのりたまひて、騰り坐しき。是に、大氷雨を零して、倭建命を打ち或はしき。此の白き猪

則ち燧を以て火を出して、向焼けて免るること得たまふ。一に云はく、王の所佩せる劍、叢雲、自ら抽けて、王の傍の草を薙ぎ攘ふ。是に因りて免るること得たまふ。故、其の劍を号けて草薙と曰ふといふ。王の曰はく、「殆に欺かれぬ」とのたまふ。則ち悉に其の賊衆を焚きて滅しつ。故、其の処を号けて焼津と曰ふ。

【七、弟橘比売の入水・八、酒折宮】

亦相模に進して、上総に往せむとす。海を望りて高言して曰はく、「是小き海のみ。立跳にも渡りつべし」とのたまふ。乃ち海中に至りて、暴風忽に起りて、王船漂蕩ひえ渡らず。時に王に從ひまつる妾有り。弟橘媛と曰ふ。穂積氏忍山宿禰の女なり。王に啓して曰はく、「今風起き浪溢して、王船没まむとす。是必に海神の心なり。願はくは賤しき妾が身を、王の命に贖へて海に入らむ」とまうす。言訖りて、乃瀾を披けて入りぬ。暴風即ち止みぬ。船、岸に著くこと得たり。故、時人、其の海を号けて、馳水と曰ふ。

（日本武尊は上総を経て陸奥に進んだ。蝦夷たちは日本武尊の勢威に恐れて、戦うことなく従属した。日本武尊は常陸を経て甲斐に至った。甲斐の酒折宮で従者と「新治」の歌の問答を行った。）是に、日本武尊の曰はく、「蝦夷の凶しき首、威に其の辜に伏ひぬ。唯信濃国・越国のみ、頗未だ化に従はず」とのたまふ。則ち甲斐より北、武蔵・上野を転歴りて、西碓日坂に速ります。時に日本武尊、毎に弟橘媛を顧びたまふ情有します。故、碓日嶺に登りて、東・南を望りて三たび歎きて曰はく、「吾嬬はや」とのたまふ。故因りて山の東の諸国を号けて、吾嬬国と曰ふ。（日本武尊は信濃に進んだ。その山中で白い鹿に変身した山の神を蒜で打ったところ、それが鹿の眼に当たり、鹿を殺してしまった。）

【一〇、伊吹山の神】

日本武尊、更尾張に還りまして、即ち尾張氏の女宮簀媛を娶りて、淹しく留りて月を踰ぬ。是に、近江の五十葺山に荒ぶる神有ることを聞きたまひて、即ち劍を解きて宮簀媛が家に置きて、徒に行でます。胆吹山に至るに、山の神、大蛇に化りて道に当れり。爰に日本武尊、主神の蛇

と化れるは、其の神の使者に非ずして、其の神の正身に当たれり。言奉せしに因りて惑は
させしぞ。故、還り下り坐して、玉倉部の清泉に到りて息ひ坐しし時に、
御心、稍く寤めき。故、其の清泉を号けて、居寤清泉と謂ふ。

【一一、一つ松】

其処より発ちて、当藝野の上に到りし時に、詔ひしく、「吾が心、
恒に虚より翔り行かむと念ふ。然れども、今吾が足歩むこと得ずして、
たぎたぎしく成りぬ」とのりたまひき。故、其地を号けて当藝と謂ふ。
其地より差少し幸行すに、甚だ疲れたるに因りて、御杖を衝きて、稍
く歩みき。故、其地を号けて杖衝坂と謂ふ。尾津前の一つ松の許に到
り坐すに、先に御食せし時に、其地に忘れたる御刀、失せずして猶
有り。尔くして、御歌に曰はく、

29 尾張に 直に向へる 尾津崎なる 一つ松 吾兄を 一つ松
人にありせば 大刀佩けましを 衣着せましを 一つ松 吾兄
を

【一二、国徳ひ歌】

其地より幸して、三重村に到りし時に、亦、詔ひしく、「吾が足
は、三重に勾れるが如くして、甚だ疲れたり」とのりたまひき。故、
其地を号けて三重と謂ふ。其より幸行して、能煩野に到りし時に、国
を思ひて、歌ひて曰はく、

30 倭は 国の真秀るば たたなづく 青垣 山籠れる 倭し麗し
又、歌ひて曰はく、
31 命の 全けむ人は 畳薦 平群の山の 熊白禱が葉を 髻華に
挿せ その子

此の歌は、思国歌ぞ。

又、歌ひて曰はく、
32 愛しけやし 我がの方よ 雲居立ち来も
此は、片歌ぞ。

此の時に、御病、甚急かなり。尔くして、御歌に曰はく、
33 嬢子の 床の辺に 我が置きし 剣の大刀 その大刀はや
歌ひ竟りて、即ち崩りましき。尔くして、馱 使を貢上りき。

【一三、八尋白千鳥】

是に、倭に坐しし后等と御子等と、諸下り到りて、御陵を作り
て、即ち其地のなづき田を匍匐ひ廻りて哭き、歌為て曰はく、
34 なづきの田の 稻幹に 稻幹に 匍匐廻るふ 野老蔓
是に、八尋の白ち鳥と化り、天に翔りて、浜に向ひて飛び行きき。
尔くして、其の后と御子等と、其の小竹の苜蓿に、足を躡り破れども、
其の痛みを忘れて、哭きて追ひき。此の時に、歌ひて曰はく、

35 浅小竹原 腰泥む 空は行かず 足よ行くな
又、其の海塩に入りて、なづみ行きし時に、歌ひて曰はく、
36 海処行けば 腰泥む 大河原の 植多草 海処は いさよふ
又、飛びて其の磯に居し時に、歌ひて曰はく、
37 浜つ千鳥 浜よは行かず 磯伝ふ

是の四つの歌は、皆其の御葬に歌ひき。故、今に至るまで、其の
歌は、天皇の大御葬に歌ふぞ。

故、其の国より飛び翔り行きて、河内国の志幾に留りき。故、其地
に御陵を作りて鎮め坐せき。即ち其の御陵を号けて、白鳥御陵と謂
ふ。然れども、亦、其地より更に天に翔りて飛び行きき。凡そ、此
の倭建命の国を平げに廻り行きし時に、久米直が祖、名は七拳脛、
恒に膳夫と為て、従ひ仕へ奉りき。

と化れるを知らずして謂はく、「是の大蛇は、必に荒ぶ
る神の使ならむ。既に主神を殺すこと得てば、其の使者
は豈求むるに足らむや」とのたまふ。因りて、蛇を跨え
て猶行でます。時に山の神、雲を興して氷を零らしむ。峯
霧谷喧くして、復行くべき路無し。乃ち捷追ひて其の跋涉
まむ所を知らず。然るに霧を凌ぎて強に行く。方に僅に
出づること得つ。猶失意せること酔へるが如し。因りて
山の下の泉の側に居して、乃ち其の水を飲して醒めぬ。
故、其の泉を号けて、居醒泉と曰ふ。日本武尊、是に、始
めて痛 身有り。然して稍に起ちて、尾張に還ります。

【一一、一つ松】

爰に宮寶媛が家に入らずして、便に伊勢に移りて、尾津
に到りたまふ。昔に日本武尊、東に向でましし歳に、尾
津浜に停りて進食す。是の時に、一の剣を解きて、松の下
に置きたまふ。遂に忘れて去でましき。今此に至るに、是
の剣猶存り。故、歌して曰はく、

27 尾張に 直に向へる 一つ松あはれ 一つ松 人に
ありせば 衣着せましを 大刀佩けましを

(参考)

【一二、国徳ひ歌】

子湯県に幸して、丹裳小野に遊びたまふ。時に 東
を望して、左右に謂りて曰はく、「是の国は直く日の
出づる方に向けり」とのたまふ。故、其の国を号けて日向
と曰ふ。是の日に、野中の大石に陟りまして、京都を憶
びたまひて、歌して曰はく、

21 愛しきよし 我がの方ゆ 雲居立ち来も
22 倭は 国のまほらま 畳づく 青垣 山籠れる
倭し麗し
23 命の 全けむ人は 畳薦 平群の山の 白檀が枝を
髻華に挿せ 此の子
是を思邦歌と謂ふ。

(景行一七・三・一一)

【一三、八尋白千鳥】

(日本武尊は能褒野に着いて病が重くなった。そこで使者
を遣わして、東国平定の任務が完了したことを天皇に報告
した。そして、この地で亡くなった。三十歳であった。天
皇は日本武尊の死を聞き、深く嘆き悲しんだ。)即ち群 卿
に 詔し百 寮に 命せて、仍りて、伊勢国の能褒野 陵
に 葬りまつる。時に日本武尊、白鳥と化りたまひて、 陵
より出で、 倭国を指して、 飛びたまふ。群臣等、因り
て、其の棺槨を開きて視たてまつれば、明衣のみ空しく留
りて、屍骨は無し。是に、使者を遣して白鳥を追ひ尋めぬ。
則ち倭の琴弾原に停れり。仍りて其の処に陵を造る。白
鳥、更飛びて河内に至りて、旧市邑に留る。亦其の処に
陵を作る。故、時人、是の三の陵を号けて、白鳥 陵と
曰ふ。然して遂に高く翔びて天に上りぬ。徒に衣冠を葬
めまつる。……(後略) …… (景行四〇年是歳)

天皇、群 卿に詔して曰はく、「朕愛みし子を願ふこと、
何の日にか止まむ。冀はくは、小碓王の平けし国を巡狩
むと欲ふ」とのたまふ。(景行五三・八・一)

乘 輿、伊勢に幸して、転りて東海に入りたまふ。
(景行五三・八月是月)